

『できることならステイードで』  
特別試し読み

Trip4 岡山

父方の祖父が亡くなった。享年九十一だった。その訃報を受けたのは六月下旬の深夜、港区からタクシーで帰っている最中だった。

僕の親類は長寿の人が多く、身内の死を経験したのはこのときが初めてだった。どうしていいかわからず、僕はとりあえず目を瞑り、手を合わせ、祖父のことを思った。

父方の祖父母は岡山県の総社市に住んでおり、僕が幼少の頃は夏になるとよく家族全員でその父の実家に帰省していた。中学に上がってからは学業と芸能の仕事でなかなか帰るタイミングがなかったが、それでも母方の実家である秋田よりは訪れる機会が多かった。

しかしながら祖父と交わした会話をほとんど覚えていない。思い出という思い出

もあまりなかった。一緒に風呂に入った際に戦争の話がされたことがあったが、それもどういった内容だったか全く思い出せず、今となってはとても後悔している。

もししたら僕は祖父が苦手だったのかもしれない。

祖父はとても活動的かつ感情的な人だった。県庁職員として働いていた祖父は、定年退職してからもアパートを経営したり、兼業していた農業を続けたりといつも忙しなくしていた。行政や社会に不満を募らせ、常に誰かに怒っていて、文句を言いに市役所に乗り込む、というのは日常茶飯事で、そのことを自慢げに話す祖父に家族は皆辟易していた。だからか祖父と父が衝突する場面も多々あり、しかも総社のきつい方言で罵り合うので、その光景は見るに堪えなかった。父だけでなく、祖母とも叔母ともよく言い合いになっていた。

しかし祖父は僕にはとても優しくかった。同年代のいとこたちはよく怒られていたのに、なぜか僕は一度もなかった。それでも祖父を好きになることがどうしてもできなかつた。

とにかく激しい祖父だったが、介護施設に入るほど弱ったと知ったのは、ほんの

二、三年前のことだった。父方、母方含めた祖父母四人の中でもっとも元気に思えたその祖父が一番最初に介護施設に入居したのは、予期しない出来事だった。

施設に入る前、祖父の体調が思わしくないとわかってから父は頻繁に帰省するようになり、神戸に住む叔母と交代で祖父母の面倒を見ていた。しかし祖父に認知症の気が見られたため、いよいよ施設に預けざるを得なくなつたそうだ。

弱りゆく父親を目の当たりにするのはきつと辛かつたに違いないが、父は会つてくるたび祖父とのことを面白可笑しく話し、茶化した。特に僕が気に入つたエピソードは、祖父が父に「お前の息子二人おるやろ。最近はどうしとんじゃ」と尋ねた話だった。僕はひとりっ子なので、いよいよ孫の顔もわからなくなつたと思つた父は、「誰と間違えとるんじゃ」と言い返したところ、「歌つて踊る方と、書く方がおるじゃろ」と話したらしい。ちなみに祖父は読書家だったため、書く方の孫が好きなのようだった。

父はそういつた話をいくつもしてくれたが、最後には必ず「だから会えるうちに会つとけ」と言つた。僕自身も、実際に対面したら祖父は「歌つて踊る方」と「書

く方」のどちらだと思ふのか単純に興味があつたので、なるべく早いうちに会いに行こうと思つていた。

そして昨年、広島でライブを終えたあと地方に残り、両親と待ち合わせして五年ぶりに総社を訪れることにした。

岡山駅から車でおよそ一時間、その間に車窓からいくつもの桃や葡萄の木が目に入る。遠くに備中国分寺の五重塔が覗けば到着は間近だ。実家の近くに川があり、そこでよくいことザリガニ釣りをした。懐かしい記憶が一気に蘇ってくる。

祖父に会いに行く前に、まず祖母を迎えに行った。祖母も、父や叔母がいない日は実家ではなく、祖父とは別の介護施設にいた。二人が違う介護施設に入居しているのは症状の違いや空き部屋の問題だそうで、祖父母が顔を合わせるのは今日のように父が来たときのみ、それも毎回ではなく、多くても月に一回ほどだという。

祖母は僕の顔を見るとこりと笑みを浮かべ嬉しそうに「ようきてくれたなあ」と言つた。介護職員の方も「いつもお孫さんの自慢をしています」と言つてくれ、それだけでもわざわざ足を運んだ甲斐があつた。

祖母を連れ、祖父の施設へと向かった。エントランスを潜るとテーブルでゆつくりとご飯を食べるひとりの老人がいた。白い粥を掬うその腕は細く、背中は曲がり、視線は定まっていなかった。

父が「別人みたいやろ」とぼそつと言った。かつて漲っていた覇気はどこにもなかった。祖父の姿に衝撃を受けた僕は、どう声をかけていいのかわからず、父はそれに気づいたのか、僕を連れて祖父の元へ近づいた。そして耳元に口を寄せ、「親父、シゲが来たで」と大きな声で言った。

祖父が僕を見上げた。そしてじつと見つめ、静かな声でこう言った。

「どちらさまですか」

歌って踊る方でもなく、書く方でもなく、祖父は僕のがわからなくなっていた。

しかし、僕らの後ろから遅れて歩いてきた祖母の姿を見つけたときは違った。祖父は顔を綻ばせ、それまでぼんやりしていた瞳を爛々とさせた。どれほどのことを忘れても、生涯を共にした伴侶だけは認識できることに僕はうっかり感動した。

それから五人で祖父の部屋へ行き、家族写真を撮った。そのときになってもなお、祖父は僕のことを認識できていないようだったので、父が改めて「あんたの孫じや」と祖父に説明した。すると「仕事は何しとるんじや？」と聞いてきたので、「歌ったり踊ったりかな」と答えた。祖父は釈然としない顔を浮かべ、父が横から「本も書いとるんじや」と付け加えた。すると祖父の表情の変化から僕を思い出したことが窺えた。

「そうじゃった。なんて言うたかのお、映画になった」「『ピンクとグレー』だよ」「本にはのお、映画になる本とらん本がある。映画になるっちゅーのは、すごいことじゃ」

そして祖父はこう言った。

「すまんのお、もういろんなことを忘れてしもーとるんじや」

それから「ねむとーなった」と言って横になった。まだ施設に来て十五分ほどしか経っていなかった。横たわる祖父は目をしばしばさせながら「みんな集まってくれて、こんな日は二度と来んじやろな」と呟いた。

すると祖父がふと、祖母の方に布団から手を出した。それは祖母の手を求める仕草だった。祖母はそれに応え、そっと手を重ねた。

「おばあちゃんの手は変わらずあったかいのお」

「いろんなこと」を忘れても、何度も何度も触れ、握った祖母の手の温もりだけは覚えているのだろう。

「おじいちゃんは昔から冷え性じゃったからなあ」

窓から差し込む柔らかい西日が二人を包んでいた。その姿を見る父の瞳は心なしか潤んでいた。そういう僕も、なるべく気づかれないよう目元を拭った。

祖父はそれから本当に眠った。祖母は手を重ねたまま、「困った人じやのお」と呆れていた。しかたなく帰る準備をし、祖母が最後に「ほいじゃけ、帰るけえの」と祖父に話しかけた。

寝ぼけ眼の祖父に僕も改めて「じゃあね、おじいちゃん」と声をかけると、祖父は僕を見て再び、「どちらさまですか」と言った。まるで落語のサゲのような返しに思わず笑ってしまった僕は、「また来るね」と言ってみる気分で施設を後にし

た。そして祖父が呟いた通り、「こんな日」は一度と来なかった。

これが祖父との最後の会話であり、もつとも濃い思い出になった。

その後も父は帰省する度よく祖父の写真を送ってくれた。写真で見ると祖父は日に日に衰えていき、最後には口から物を食べられなくなるほどだった。

いよいよ介護施設から危篤を伝えられた父は、すぐに岡山に戻った。到着後、最初に父から送られてきた祖父の写真は呼吸器をつけた姿で、意識はすでになかった。

数日後、祖父は静かに鬼籍に入った。

訃報を受け、すぐにカレンダーで葬儀や法事に行けそうか確認したが、どうにも調整がつかなかった。父にメールで「行けなくて申し訳ない」と伝えると、「お前の仕事柄そんなことは分かっている」とすぐに返事があった。それから父は葬儀の様子を送ってくれた。棺に入った祖父は頬に綿を詰め、死化粧をしていた。今まで見たことないほど穏やかで安らかな表情だった。怒りっぽかった祖父はもうどこにもいなかった。その写真を見たとき、好きではなかったはずの祖父のことが不思議と愛おしくなり、また虚しくなった。

法事を終えた後、父から祖父について色々教えてもらった。戦時中、十六歳で予科練に志願した祖父は、終戦が一年遅ければ特攻隊として出撃することになっていた。しかし戦後、日本が他国を傷つけたことに胸を痛め、戦争に関して改めて調べ直すことにした祖父は、硫黄島、沖縄、オーストラリアなどに直接足を運び、現地の人に話を聞いて慰霊に回っていたという。赤十字とユニセフには若い頃から少額ながら毎年寄付し、死ぬまで続けていた。博打を嫌い、囲碁や将棋もできるがしな人だった。「優劣が人を不平等にする」という信念の下だったという。

「じゃあなんであんなにいつも役所に怒りに行ってたん？」

「理不尽だったり、不平等なルールで自分や仲間が損していたりすると我慢できない人なんだよ。だから役所に話を聞きに行つて納得できるまで戦つてくるんだ」

思っていた祖父とはあまりにもかけ離れていて、少しも本質を見抜けていなかった自分がかつかりする。と同時に、それほど素晴らしい祖父がいたことを喜ばしくも思った。祖父の話をする父も、どことなく誇らしげだった。

最後に岡山を訪れたあの日、父はそのまま残るといっているので、僕は母と二人で新幹

線に乗って東京に帰った。その車内で、「じいちゃん亡くなったら親父、泣くかな」と僕が母に尋ねると、母は「泣くに決まってるじゃない。ああ見えて泣き虫なんだから」と答えた。祖父はゆっくりと衰えていったので、父はある程度覚悟しているように見えた。だから母の返答は僕にとって意外だった。

「まじかよ、親父の泣き顔とか、見たくねえな」

本音を言えば、仕事で葬儀にも法事にも行けないと知ったとき、僕は少しだけ安心した。父の弱った姿を見ずに済むと思っただけだ。

タクシーの車内で訃報を受けたとき、父のことを一番に心配した。僕は父に、「父さん、気持ち大丈夫？」と返した。普段親父と呼んでいたはずが、なぜかそう呼べなかつた。

父からは「大丈夫ですよ」と返信があつた。なぜか敬語だった。

ああ、なんか、家族っぽく。

タクシーの窓から東京の夜空を見上げ、僕はぼんやりそう思った。